



安部公房「三部作」論：失踪者という〈モチーフの発見〉についての一考察

金岡，直子

(Citation)

国文学研究ノート, 34:13-26

(Issue Date)

1999-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012332>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012332>



安部公房「三部作」論

——失踪者という〈モチーフの発見〉についての一考察——

金岡直子

はじめに——「三部作」という捉え方

安部公房の代表作『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』の三作品は、その〈原型的作品¹⁾〉である「チチンデラ ヤバナ」「カープの向う」も含めて、安保闘争や高度経済成長などで社会的な動乱がみられた一九六〇年代（以下、「六〇年代」と略す）初頭から後半にかけて発表されたものである。これら三作品を「三部作」として捉える考え方は、秋山駿のインタビュエーでの、〈一応三部作という形で、失踪前駆症状にある現代をかいてみました（後略）〉という安部公房自身の発言による²⁾。だが、この発言と三作品とを正面から突き合わせて論じたものはいまだなく、「三部作」という発言を抜きにしても三作品に関する評価には大きな落差が生じているのが現状である。多くの論では『砂の女』を安部文学の頂点としており、その後の作品群を『砂の女』からの主題の後退としてみている。この原因については、田中裕之が「『砂の女』論」（『日本文学』昭和61・12）において指摘している通り、佐々木基一の評論「脱出と超

克——『砂の女』論」（『新日本文学』昭和37・9）が『砂の女』に対しての絶大なる評価を決定づけてしまったことによる。しかし、これでは前掲の安部発言を無視してしまっていることになりはしないだろうか。作者自身が「三部作」と主張する以上、三作品に通底するモチーフを見出し、総合的な評価を下すことは、可能な作業であるはずなのだ。

また、「六〇年代」という時代を安部公房が描くとき、彼は何故「失踪者」という存在不確かな人々を、いわば〈キーワード〉として選択したのであるうか。また、あえて「六〇年代」を描こうとしたのは何故であろうか。

拙論では、まず安部公房が三作品で示す小説時間における現代（以下、「現代」と略す）を可能な限り特定し、その時代の枠のなかでの安部の姿を捉えてみたい。そして最終的には、安部公房が「三部作」の中でひたすらこだわった「失踪者」について資料をまじえながら検討していきたい。

一 「現代」を探る——時代の特定

安部公房の意識の中で、「現代」を書くということはどういった捉え方をされているのだろうか。「座談会・現代をどう書くか」（『群像』昭和41・11）の場で安部は、自作での「現代」の描出に関して、「現代というのはさつきからいつているように限定的にしかとらえられないのです。だからいろんな形が出るのは当たり前だ。だいたい小説でとらえようと、エッセイ、評論でとらえようと、動機は一つなんだ。」と「現代」を表現することについて一定の限界を明示しつつも、多角的な形で「現代」を照らすことは可能であると断じている。

しかし時期を下ると、安部はその〈動機〉について『死に急ぐ鯨たち』（昭和61・9・新潮社刊）で序文的におかれた「なぜ書くか……」（初出／『リベラシオン』昭和60・3）のなかで、「生きている理由に解答がありえないように、書く行為にも理由などあるはずがない」と記している。（「なぜ書くか……」）という問いかけすら、現在社会ではもう無意味になってしまった、とする安部は〈積載量過剰のトラックのような時代をくぐりぬけて、作者は失望し、かつ謙虚になった。〉という言葉をも、披瀝するに至っている。言うまでもなくそれは、安部が文学的活動に旺盛であった時代を指し、意欲的に描出を試みたかつての「現代」への郷愁を率直に記したものであろう。では、その〈積載量過剰のトラックのような時代〉とはどういった時代であったのか。まず「現代」という時間枠を特定する手掛か

りを、①書類年月日、②新聞記事、③作中価格、といった三つのパターンに分別した。以下、それぞれについての考察を順を追って述べていきたい。

①書類年月日からの考察

『砂の女』『燃えつきた地図』の作中書類に記載された年月日

『砂の女』における二通の書類の日付については、すでに廣瀬晋也が「メビウスの輪としての失踪」（『近代文学論集』13・昭和62・11）において興味深い指摘をしている。それは、（仁木順平の「失踪に関する届け出の催告」で日付は昭和三十七年二月十八日、他は同人を失踪者とする「審判」で日付は同年十月五日、いずれも家庭裁判所通告の文書である。昭和三十七年二月といえば、周知のように、作者安部公房が花田清輝、針生一郎らとともに日本共産党を除名された月である。）というものである。続けて廣瀬は、「二枚の公文書に記された仁木順平の生年月日は昭和二年三月七日で、これはドナルド・キーンも指摘しているように、安部の誕生の月日（生年は大正十三年）と同じである。」（括弧内補足・原文）として、書類上の仁木順平の生年月日と、行方不明時の仁木順平の年齢との違いがみられ、書類上の仁木順平の年齢と、作品発表時の安部の実年齢とが重なるという矛盾点も、指摘している。廣瀬は、ここに〈作者の意図的な操作〉を見て取り、〈以上のような年月（日）の符合は、作品が作者個人の歴史的現実と二重写しに読まれる

ことを半ば許容する、作者の暗黙の諒解もしくは期待を示す（「同前」としている）。

ここで、ひとつ注意を促したいのは、安部自身（登場人物は——引用者）できれば名無しのままで済ませたいと思う。（「藤野君のこと」／『笑う月』昭和50・11・新潮社刊に収録）という前置きをした上で、〈「砂の女」の仁木順平にしても、失踪後、手続上の必要からはじめて明らかにされた氏名であつ（「同前」）たのだと、書類作成段階で、深い意味づけもなく命名したと述べていることである。その点では、名前自体が「仕方なく」付けられた「仁木順平」の生年月日についても、ほぼ同様の事が言えるのではないかと考えられるのである。以上の点から、ここで特定する時代はあくまで『砂の女』『燃えつきた地図』における書類発行年（昭和三十七年）（昭和四十二年）を基としておきたい。

②新聞記事からの考察

『燃えつきた地図』の中に挿入された、根室の部下・田代が差し出した新聞記事

この新聞記事（『朝日新聞』昭和42・7・15朝刊）については、その年月日を入念に切り取った安部の意図から、安部が重視したのはその日付でなく、記事内容であることは明瞭である。よって、ここでも主に記事内容に重点を置きたい。

「蒸発人間」の全国一斉捜索が開始されたのは、昭和四十二

年の七月十三日の事である。警察庁は、以後三カ月間、三十九の都道府県警に「家出人、身元不明死体の相談所」を開設し、大々的なキャンペーンを打ち出す。通常、蒸発人間の捜索などは一般人のあずかり知らぬ形で捜索されるのだが、当時社会問題化されていた中年男性の蒸発の増加などで、昭和二十六年五月からこの年の六月までに、捜索の対象となる「蒸発人間」の数はおよそ九万人という驚異的な数字にまで発展しており、事態を重くみた警察庁側が大きく動いたのである。

同時期、「蒸発人間」に関心を寄せていた諸田和治が「失踪論——非現実の失踪とはなにか——」（『層』昭和42・5／『非在への失踪』昭和46・4・審美社刊に収録）のなかで語る〈失踪〉も、〈至極ありふれた日常の中〉の中年男性に多くみられる自然の行為として論じられている。安部も、一般の人々が眉をひそめるであろう自殺や失踪などの〈逸脱行動〉について、それほど異端視するほどのものではないのだ、という材料として新聞記事を利用したのである。このことは、記事を差し出すときに田代が、行方不明者の多さについて〈「驚いたなあ。根室課長のこと、べつに例外つてわけじゃなかったんだ。」〉と主人公に語るための単なる伏線でしかなく、作品上梓二カ月前に報じられたこの新聞記事は、安部にとってはまさに「渡りに船」でしかなかったものと思われる。従って、「現代」の特定に大きく関連する材料では無いのだが、当時、失踪者たちの増加が表面化していたこと、そして大半の人間は田代の如き反応を見せたに過ぎなかったということを安部が描出している点

〈原型的作品〉である「カーブの向う」の発表年も含め、昭和四十一年および四十二年である。安部は、初校ゲラから加筆訂正を徹底して行った⁵「燃えつきた地図」の改稿の中で、その価格を気にもとめなかったのだろうか。筆者はここに、安部の《昭和三十五年》に對しての拘泥を見ることにし、コーヒー代から考察される《昭和四十年》から《昭和四十四年》の時代とともに「現代」の枠として特定したい。

以上、三方向からの時代の特定を試みた結果、安部の描こうとしていた「現代」は、昭和三十五年～四十四年（一九六〇代）に該当することが突き止められた。この時代枠は「三部作」発表時期ともほぼ重なり、「現代」を実時間のなかで描き出すことによって、安部の〈記録文学〉への欲求も満たされたのではないだろうか。

二 作品発表期・「六〇年代」前後の時代背景

繰り返し述べることになるが、「三部作」中、二作品には〈原型的作品〉がそれぞれ存在する。それらも含めて発表期を確認していくと、昭和三十五年九月、『文学界』に創作「チンデラ ヤバナ」を発表したのが始まりである。続く「砂の女」は「チンデラ ヤバナ」が發展した長編小説であり、昭和三十七年六月、新潮社から《純文学書き下ろし特別作品》として刊行された。このときの状況について、新潮社の編集者であった谷田昌平は、その回想文「「砂の女」の頃」（『新潮』平成

5・4）で、〈昭和三十五年に新潮社の《純文学書き下ろし特別作品》の企画を立て、それに執筆してもらうために安部さんに初めて会った〉（その前月の『文学界』に安部さんは短篇「チンデラ ヤバナ」を発表していたが、これを長篇小説にしようというので早速快諾してもらった。）と述懐している。続く『他人の顔』は昭和三十九年一月、『群像』に当初から長編小説として発表。同年九月に単行本として講談社から刊行されるまでに、改稿に改稿を重ねられた。このときの反省からか、安部は雑誌に長編小説を掲載することを控えるようになったという。次ぐ短篇、「カーブの向う」は昭和四十一年一月、『中央公論』に發表された後、その發展形作品が昭和四十二年九月に、安部公房の《純文学書き下ろし特別作品》第二弾『燃えつきた地図』として刊行される。この發展の経緯について、明示した記録は無いが、その推移を考える材料を挙げておこう。それは「三部作」以外の小説の事であるが、前出の谷田によれば、安部に〈次の長篇に着手してもらうために短篇を書くことを繰り返すすめ〉ていたとあり、安部が、長篇の取っ掛かりとして短篇を書いていたことがこのことから窺えよう。つまり、執筆時期として重視すべきは長篇よりも、むしろ短篇の発表期であるということになる。

では昭和三十五年から四十二年、いわゆる「六〇年代」の日本に何が起こっていたのか。周知のように、この「六〇年代」は戦後の日本社会において、一つの転換期になった時代であり、作家や批評家をはじめとする、文化人たちの思想問題に関して

も大きな意味を持つ時代でもある。中野好夫による「もはや「戦後」ではない」という衝撃的な題名の評論文が『文芸春秋』に発表され、世間をにぎわしたのは昭和三十一年二月の事である。この評論が口火を切る形で、文壇も「戦後」終焉論について問題視することになるのであるが、その「戦後の終わり」の決定打となるのは、経済企画庁による『経済白書』上の公式見解としての「もはや「戦後」ではない」発言であろう。この後、日本は「神武景気」「岩戸景気」と呼ばれる空前の好景気や、池田内閣による所得倍增政策を経て、高度経済成長期を迎えるのである。このように、「六〇年代」は国民生活の向上という見地においては、日本が「戦後」の暗い影から脱却したかに見えた時代だが、その反面「安保闘争」に代表されるような激しい動乱もあり、世相や、その時代の人々に多大な衝撃を与えた時代でもあった。

安部公房はこのころすでに共産党員として多くの活動に参加している。文学的な出発をハイデガー、いわゆる『実存主義』の立場から取った安部の、共産党入党がいつのことであるのか。飯島耕一の「報告 安部公房あるいは無罪の文学」（『批評』春季号・昭和34・1）の指摘によると、安部は「パベルの塔の狸」（『人間』昭和26・5）を書いた前後の時期に、（パベルの塔の「塔員」、つまりシュールリアリストであると同時に、共産党の「党員」にもな）ったということだが、その入党の時期についての明示は、安部によってもなされずまいなのである。当時、安部が参加していた共産党の活動は、『新日本文学』

会」と対立する、党主流派（所感派）を支持する側のものであった。針生一郎「極私的安部公房ノート」（『ユリイカ』昭和51・3）によると（文学学校（所感派のつくった学校——引用者）のなかにも、『現在の会』（安部が島尾敏雄らと昭和27年に組織したもの——引用者）のなかにも細胞やグループがあり、安部公房は後者のほかにも文化関係の指導部の会議に出ている様子だった。六全協後にたまたま左翼暴露雑誌『全貌』を読んで、安部公房は『現在の会』などで多くの文学者を党員に勧誘したため、所感派内部で高く評価されていたという記事に接し）たことがあると記されており、安部が種々のグループに接近し、党のために、党の思想を文学的に表現していくために、本多秋五の言うところの、その（「身軽さ」）（『物語戦後文学史・変貌の作家・安部公房』①⑥／『週刊読書人』昭和36・1／22／3／12）を最大限に利用して、より多くのコミニズム文学者を獲得しようとしていたことが窺えよう。安部は、最初の評論集『猛獣の心に計算器の手を』（昭和32・12・平凡社刊）のあとがきの中で、このころの自身の思想的変遷を次のように述べている。

はじめての評論集だ。内容もほとんど二十年間にわたっている。年齢的にも、時代的にも、まことに変化のはげしい十年間だった。私自身、実存主義から、シュール・リアリズムそれからさらにコミニズムと、思想にも方法のうえでも大きく三転した。

しかし、こうして辿り着いたコミニズムも、昭和三十七年

には共産党から、花田清輝、針生一郎とともに除名処分を受け、手放さざるを得なくなるのである。安部にとつての「六〇年代」とは、ようやく入手した自らの〈思想〉や、表現〈方法〉との訣別・転換の時代であった。そこで、その転換の基礎ともなる〈モチーフの発見〉がこの時代にあったのでは、との仮説が立てられる。その〈モチーフ〉とは、いうまでもなく「失踪者」である。では、安部はその「失踪者」問題に、一体何を託したのだろうか。

三 「失踪者」と「未帰還者」について

友人・佐々木基一をして〈安部君は失踪者が好きだからな。〉（『燃えつきた地図』昭和42・9・新潮社刊・付録「座談会“燃えつきた地図”をめぐって」の中での発言）と言わしめたほかに、「失踪者」問題に固執し続けた安部公房。彼は、武漢徹との対談「歴史を棄てるべき時」（『ユリイカ』昭和51・3）においても〈終局の理想は乞食〉であるとして〈進歩という概念を価値で捉える〉社会に疑問を投げかけ、〈歴史を棄てるべき時〉に〈ますます歴史にしがみつこうと〉する行為を断じている。しかしその「しがみつки」こそ、冒頭の安部発言中の「失踪前駆症状」のひとつにほかならない。以下、断片的ながら、「三部作」の中に散在する「失踪前駆症状」について述べてみたい。『砂の女』の主人公は、砂穴での「監禁」が明確化されたとき、社会における自己の存在について、〈「……税

金も払っていりゃ、住民登録票だって持っている……」と主張する。つまりこうした公的証明（書）でしか自己の〈歴史〉を言い表せず、日常生活を超えてもなお、紙切れによる安堵感を渴望せずにはいられないのである。これは、この男に限らずとも、現代に生きる人間の殆どが「証明書」という紙切れの上に、自己の存在を成り立たせている不安定な社会への警句でもある。しかし、男はそうした社会に一層「しがみつき」、女に「新聞」を望む。〈尋ね人の広告〉や〈失踪記事〉などの情報入手を目論んでいた男だったが、いざ「新聞」が手に入ると、その入手ルートそのものに「脱出の可能性」という〈期待〉をかけるのである。だが、その〈期待〉には〈あっさり〉と〈裏切られ〉、男は新聞記事の見出しに目をやる。そこに男は〈欠けて困るものなど、何一つありはしない〉という感想をもつが、これはそのまま、自己という存在が砂の中に隔離されているようにとも、社会は厳存と機能し、絶えず〈流動〉しているという悲壮な自覚に通ずるのである。「しがみつき」の対象であった「新聞（＝紙切れ）」に裏切られ、やがて「あきらめ」るという「二面性」。この人生への「二面性」こそが、「三部作」に共通してみられる「失踪前駆症状」なのである。

次ぐ「他人の顔」では、〈おまえの喪失は、そのまま、世界の喪失の象徴のよう〉と、男の「人生」への執着を増幅させる存在として妻が置かれている。男にとって〈第一号の他人〉である妻は、男の〈姦通〉計画に関して〈あなただって、私に見抜かれてしまっていることくらい、百も承知にちがいない。承

知の上で、黙って芝居をつづけようと、催促しているのだ。」と告白し、自分は「協力」していたのだとする。この妻の「協力」そして「裏切り」に、先の「二面性」を当てはめるとするなら、妻も男に〈象徴〉される〈世界〉に半ば「あきらめ」の感を持ち、その反面「しがみつki」もしていたといえるのではないか。「協力」の〈契機〉について〈あなたの自信たっぷりな様子を見ているうちに、つい錯覚してしまつた〉と語る妻は、最後に〈仮面が戻って来ない以上、私だって戻るわけにはいかないではありませんか〉という結論を出す。このように自己の「存在」価値を位置づけ、男の前から「失踪」する妻の価値観は、いまだ男を中心として動いており、「失踪前駆症状」としての「二面性」は妻の中で果てしなく続いてゆくのである。

「三部作」中唯一、〈失踪者〉そのものを取り挙げている『燃えつきた地図』では、少なくとも主要人物二人が、人生の「地図」を見失う。失踪者として追跡される根室は〈大型二輪〉〈無線通信士〉〈電気溶接〉などの〈免状〉という〈人生の錨〉によって自己の「存在」を世間に訴えようとしていたという。しかしその〈錨〉は人生の指針としての「地図」にはなり得ず、根室は人生への「しがみつki」や「あきらめ」からの脱却として失踪する。一方〈興信所の調査員〉として失踪者・根室の足取りを追う男は、仕事との脈絡もなしに別居中の妻に連絡を取ろうとする。だが、主人公の心のうちには、もはや妻への愛情・憎悪といった感情は、既に残されていない。男が妻の洋品店を訪ねたのは、あくまで自己という「存在」を確認しにゆく行為

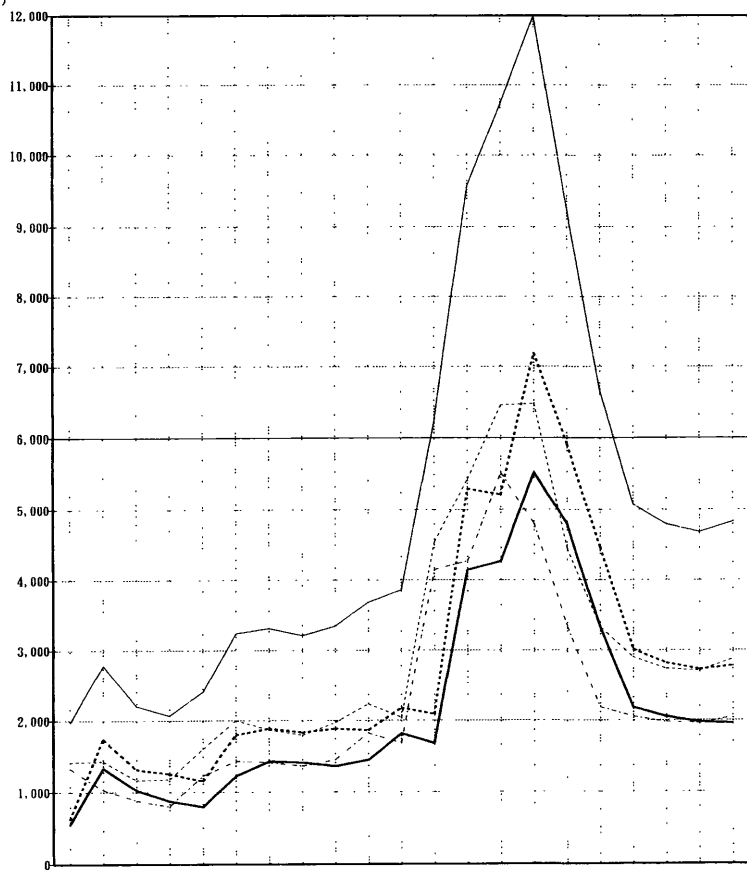
であり、根室が数々のライセンス取得により、かろうじて社会に〈錨〉を引っ掛けていたのと同じ行為なのである。男はそこで、妻の仕事での〈感覚〉に魅了されながらも〈ぼくはやはり戻るわけにはいかないのだと思う〉と判断し、自己の「存在」価値についての不必要を見て取ったのである。そうして男は、コーヒー店〈つばき〉での暴行事件により、自己の「存在」意識を失い、〈過去への通路を探すのは、もうよそう。手書きのメモをたよりに、電話をかけたりますのは。もう沢山だ。〉と〈記憶の中断〉状況を受け入れるのである。この意識変化について、安部は〈(人間の意識なんて——引用者) 本当に目を開いてみたら、こんなもんであるはずなんだ、だれもがね。〉(前出「座談会・燃えつきた地図」をめぐって)と述べており、都会生活での孤独や不信、そして焦燥感のなかで〈だれもが〉失踪者になり得ることを指摘している。

だが、こうした社会的病理のみを言及し、〈期せずして〉〈焦燥感の本質〉(前出「モスクワとニューヨーク」)を描いたことのみが、「三部作」の執筆意図といえるのだろうか。

安部の〈モチーフの発見〉の契機をさらに探るうえで、実社会における「失踪者」問題、いわゆる「失踪宣告事件」について、小説時間における「現代」の幅として示された「六〇年代」の数値状況の考察に移りたい。まず、六〇年代の全国家庭裁判所での失踪宣告の受理状況について、『司法統計年報 3 家事編』(昭和23・6・43・6・最高裁判所事務総局総務局刊)の統計からグラフ作成を試みた。(5)〔資料〕としてここに載せてお

[資料] 失踪宣告の受理状況

(単位 件)



	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
— A 受理総数	1968	2776	2205	2063	2401	3236	3305	3206	3337	3681	3857	6234	9574	10731	11993	9246	6655	5068	4787	4681	4825
— B (うち旧受)	554	1343	1031	877	796	1235	1435	1414	1371	1455	1816	1683	4148	4274	5518	4800	3331	2178	2054	1972	1959
--- C (うち新受)	1414	1433	1174	1186	1605	2001	1870	1792	1966	2226	2041	4551	5426	6457	6475	4446	3324	2890	2733	2709	2866
.... D 既済	630	1745	1325	1267	1166	1801	1891	1836	1882	1865	2174	2086	5300	5213	7193	5915	4477	3014	2815	2722	2779
-- E 未済	1338	1031	880	796	1235	1435	1414	1370	1455	1816	1683	4148	4274	5518	4800	3331	2178	2054	1972	1959	2046

く。また、当該年代（昭和二十三年～四十三年）の幅については、『司法統計年報』自体が昭和二十三年に創刊されたことと、『三部作』の中の最終発表作である『燃えつきた地図』が昭和四十二年発表であり、その後一年間の猶予を見、通算二〇年の間隔で区切ったことを記しておきたい。グラフの実線Aはその年度の受理総数を表すのだが、これによると昭和三十三年度を境として「失踪宣告事件」の数値が、極端な形で増加傾向を示していることが分かる。つまり昭和三十四年度に、数値の急激な増加をもたらす何らかの変化が、社会全体にみられたということであろう。その主な原因として挙げられるのが、昭和三十四年六月に施行された未帰還者に関する特別措置法、いわゆる「戦時死亡宣告事件」である。当然ではあるが筆者が前出のグラフ作成時に使用した数値には、この「戦時死亡宣告事件」も件数として含まれている。「三部作」における主人公らの失踪の特色を考えると、本来ならば「所在不明」に代表される「普通失踪」と、船舶の沈没や「戦時死亡宣告事件」などによる「特別失踪」との区別を明らかにさせるべきであるが、その他の資料などからも双方の実数は確定できないのが目下の状況である。だが、同時に筆者はこの別を明らかにすべきでないとも考える。何故なら、ここで注目すべきは「失踪者」と「未帰還者」との別が、ほぼ無に等しいという事実であるからだ。

周知の通り、安部公房自身、満州からの引き揚げ者である。外地からの引き揚げ体験に基づいて描かれた『けものたちは故郷をめざす』（『群像』昭和32・1～4）で主人公・久木は、

ようやく引き揚げ船に乗り込めたものの、阿片の大口取引のすべてを知る者として船内に監禁される。日本の港に着きながらも、あと数十センチ向こうにある祖国の土を踏めずに、彼は〈けもの〉のように発狂してしまうのであった。無法地帯と成り果てた大陸を南下する中での恐怖のあとに、用意された悲惨なラストシーンは衝撃的である。やはりその想像力の源には、自らの引き揚げ体験の苛酷さがあり、本作品全体には安部公房の実体験が、鮮明に投影されているといっている。それを裏付けるかのように、自筆「年譜」（『新鋭文学叢書② 安部公房集』昭和35・12・筑摩書房刊に収録）に次のような記述も残されている。

その年の暮もおしこまれてから、やっと引き揚げ船に乗り込めた。上陸まぎわに、船内にコレラが発生し、港外に十日近くもとめられ、発狂する者まであらわれた。

（自筆「年譜」・昭和二十一年の項）
眼前に眺め得る祖国を前に、つぎつぎと発狂していく人々。こうした異常な状況を眼前にした、安部に残したものの「重さ」は想像を絶するという他にない。その「重さ」についての記述を『けものたちは故郷をめざす』の中に見るならば、主人公が荒野の中でミイラを目撃し、自分の苦しみと照合しながら、

おれたちと同じようにあの荒野を歩いてやってきて……
そして、あの苦しみのあとで、まだ死ななければならぬなんて、はたして信じることができたのだろうか……いや、そんな不公平は、絶対に信じることができなかったにちが

いないのだ……（後略）

と、述懐する姿は、まさしく佐世保港外に十日間足止めされたときの、安部公房自身であるのだ。また、同様の場面は『燃えつきた地図』の後半部分で、失踪者・根室課長の足取りを掴みかけた主人公の探偵が、何者か（おそらく根室の行方を知る者たち）によって暴行を受け、自らの名前や職業など、一切の記憶を喪失してしまう箇所にも見受けられる。真実（『けものたちは故郷をめざす』の久木久三においては「日本」）を掴みかけたとたん、その一切を奪われてしまうこのパターンにも、安部の、何らかの強烈な「原体験」が投影されているのだろうか。現時点でその「原体験」を探ることはできないが、ただひとつ、ここで強調できるのは、『日本へ引き揚げてくるまでの長い旅程の中で数々の苦難を乗り越えてきた引き揚げ者である安部が、公的機関から発せられた「戦後」の終焉を誇張するかのような発言と、「未帰還者」に対するいわゆる「切り捨て」行為に、果たして鈍感でいられたろうか」ということである。

さらに、満州での生活の中で、彼のなかに内地コンプレックスとも呼ぶべき内面が生まれていたことも少し考慮に入れておきたい。安部が満州での生活を話すときに、頻出する話柄が二つある。ひとつは、教科書でしか知り得ない祖国「日本」の風景についてである。（地平線までのつぺりしてなにもな）い満州にいながら（家のすぐ裏に山があったり、川があったりする）日本の教科書を使用していたことに安部は、栗坪良樹によるインタビュー「『錨なき方舟の時代』（『すばる』昭和59・1）

で次のように語り、そのコンプレックスをあらわにしている。

谷川があつて、せせらぎがあつて、そこに魚が泳いでいたんじゃ、こっちはコンプレックスにおちいるしかないだろう。まさにファンタジーだ、あこがれだよ、窓からひよつと見たら山が見えるなんて、まるでチョコレートの箱の絵みたいじゃないか。

その「日本」と、日本の「植民地」として存在していた満州とは、窓から眺望できる風景一つを取っても、大陸と島国という違いがあった。また、安部は同インタビューで、学校の教師には何かにつけ「内地の子供」と比較され（内地の子供っていうのは偉いものだと本気で信じていた）とも続いている。ふたつめの話題は、敗戦後の満州での（無政府（警察）状態⁽⁸⁾）のなかで遭遇した日本人の連帯感の無さについてである。それは、朝鮮民族の人や中国人らが金銭面で言い争うときには、必ず同じ民族のものが（臨時の陪審団）となってその善悪を取り決めるというものである。大陸の人々にはこのような習慣があるのに対し、日本人らはそうして集まりもしないばかりか（一瞬にして姿を消）すというのである。これは（無政府（警察）状態）において、日本人の立場が不安定なものになったからこそ、みられた現象であろう。そうした現象を目の当たりにして、安部は「日本」という故郷に失望し、やがて（故郷喪失）の念を抱くのである。

結論

自らの文学について「根なし草の文学」（「根なし草の文学」・『波』昭和44・9～10）と評している安部の文学的な《根》は、実際には、内地コンプレックス、および安部の言う《故郷憎悪》にあるのではないだろうか。この、コンプレックスとしての《根》の存在を、安部自身が否定も肯定もできずにいた《文学の揺籃期》に、物質的豊かさのみに傾倒していく政府による「未帰還者」へのいわば「切り捨て行為」について、改めて見詰め直したのではなからうか。

国家の発した「五族協和」「新天地」という言葉を心底信じて渡満し、日本とは掛け離れた環境の中で生きぬいた者たち（満州の場合、移民者の大半は山村の貧農や小作人などであったという）が、敗戦後、国家に裏切られるという厳しい現実。しかし、そのような状況下にあっても、日本を目指しながら朽ち果てる運命にさらされたミイラや、目の前の日本上陸を待ち望む緊迫感の中で、発狂してゆく者たちがいた。このようにして永遠に故郷の土を踏まずじまいであった「未帰還者」の人生に對し、安部公房が特別な想いを持った、と考えてまず妥当であろう。

加えて、安部は、前述の共産党除名による《思想》と表現《方法》の剥奪から、新たな表現《方法》を確立しようとしていた。その新たな《方法》で、「未帰還者」らを「失踪者」と同じく、中核からはずれた存在として「戦後」のなかに葬り去

ろうとした行為に對して、異議を唱えようとした。つまり、実社会という「時代」そのものを「失踪者」問題という事項に託して描こうとしたのでなく「特別失踪者」としての「未帰還者」らへの執着を、当時社会問題化していた中年層の失踪事件に、主題を置き換えた上で「三部作」として発表したのだ。小説時間における「現代」と「失踪宣告事件」グラフとの符合ぶりは、そのことを明確に示しているといえる。

谷真介作成の「年譜」（『安部公房レトリック事典』平成4・8・新潮社刊）にも現れているように、《エスペランティストで、コスモポリタンを任じていた》という父の影響を多大に受けていた幼少の安部が、成長してから体験した日本という国の横暴さは、払拭しきれぬ思い出になっていったのである。その思い出を、愛用の《消しゴム》で書くことによって、その一切を消し去ろうとした彼の心境は、未帰還者らを法力によって「特別失踪者」扱いとし、新しい時代の幕開けの為に、切り捨て措置を取った公的機関や、その措置に異議を申し立てることもなくただ失踪者の増加のみを話題にした民衆へのささやかな反抗へと結び付く。「三部作」として、これらの作品が六〇年代に立て続けに発表された意義は、実はここにあったのではないだろうか。

注

（1）菅野昭正「解説」／『カープの向う・ユーブケツチャ』

(昭和63・12・5・新潮文庫)より引用。ちなみに「チンデラ ヤパナ」は『砂の女』の第一章から第七章に、「カーブの向う」は『燃えつきた地図』の冒頭とラストシーンに相当する。

(2) 秋山駿インタビュー「私の文学を語る」(『三田文学・特集安部公房』昭和43・3)

(3) ひとつ腑に落ちないのは、この記事のことを田代が「『去年の記事』」として主人公に差し出している箇所である。①での考察による時間設定では、同作品は根室の妻からの調査依頼書による日付の、昭和四十二年二月二日から始まっており、記事が話題になるのは同年二月十四日より以前のことなのである。何故、安部がこの新聞記事を「『去年の記事』」という位置に置いたのか。この点に関しては、安部は同作品の「原型的作品」である「カーブの向う」の発表年、『昭和四十一年』について固執する点があったのでは、とも推察できうるので今後の課題としたい。

(4) ただし、『純文学書き下ろし特別作品』として上梓された際には「横浜」「甲州街道」という記述は削除されている。その代わりかどうかは分かりかねるが、地図と前後して本文に載せられている、主人公の興信所に対する「報告書」の《同(二月十二日——引用者)二時五分》の項の文末には「(甲州街道経由)」と記されている。草稿地図執筆時と単行本上梓との間、安部の意識に、何

らかの変化があったかどうかはいまもって不分明であるが、草稿時の地図と単行本の地図とは細部にわたって多少の違いがある(ただし、筆跡は同一のものである)ことから、地名の削除によって、安部自身が地図上の(無国籍)性を自らの手によって作り上げ、読者に対して『地図』の攪乱を図ったのではないか、というのが筆者の見解である。

(5) 谷田昌平の回想文「『砂の女』の頃」(『新潮』平成5・4)には、そのころの安部の加筆ぶりについての記述も見られるので、以下引用しておく。

「コピー機「フジゼロックス」が登場したのは「砂の女」刊行の三カ月後である。「燃えつきた地図」の折は、原稿を受け取るたびにすぐに社に戻ってコピーをとって安部さんに届け、途中で直しがあるとそれを電話で受けて生原稿に書き入れたり、直しについての相談を受けた(りした)」と、加筆訂正のためにズタズタに切り取られ、生原稿が散逸していった「砂の女」での教訓が活かされていたことを窺わせる。

(6) 「失踪宣告の受理状況」という名目で資料にはあったのだが、同資料は家庭裁判所側が失踪宣告について受理した届け出などのすべてを指す。このうち届け出が取り消されたものについても、受理総数、および既済事件の数に入っていることも明記しておきたい。また、民法第三〇条第一項における失踪宣告についての記述は以下の通

り。《不在者ノ生死カ七年間分明ナラサルトキハ家庭裁判所ハ利害關係人ノ請求ニ因リ失踪ノ宣告ヲ為スコト得》

(7)

昭和三十四年に法令番号第七号として施行。その失踪原因については不明とされるのが原則である。現在の民法には現存しないが、民法第三〇条第二項に特別失踪についての記述がみられる（ただし、昭和三十七年に法令番号四〇号として第二項は改正）。以下、記載しておく。

《戦地ニ臨ミタル者、沈没シタル船舶中ニ在リタル者其他死亡ノ原因タルヘキ危難ニ遭遇シタル者ノ生死カ戦争ノ止ミタル後、船舶ノ沈没シタル後又ハ其他ノ危難ノ去リタル後一年間分明ナラサルトキ亦同シ》

(8)

この《無政府（警察）状態》について安部は、ドナルド・キーンとの共著『反劇的人間』（昭和48・5・中公新書刊）や、小林恭二との対談『御破算の文学』（『海燕』昭和61・1）などで繰り返し述懐している。

付記

なお、「資料」として取り挙げた「失踪宣告事件」グラフにおいては、昭和42年におけるグラフの下降の原因については、文中で述べた「蒸発人間」の全国一斉搜索の成果でもあろう。蛇足ながらここに記す。

本文の引用は『安部公房全作品①～⑮』（昭和47・5～48・6・新潮社刊）を底本とするが、『全作品』未収録作品につい

ては、初出および単行本収録文、現在刊行中の『安部公房全集』（平成9・7～新潮社刊）に拠った。文中敬称略。

（本学大学院博士課程）